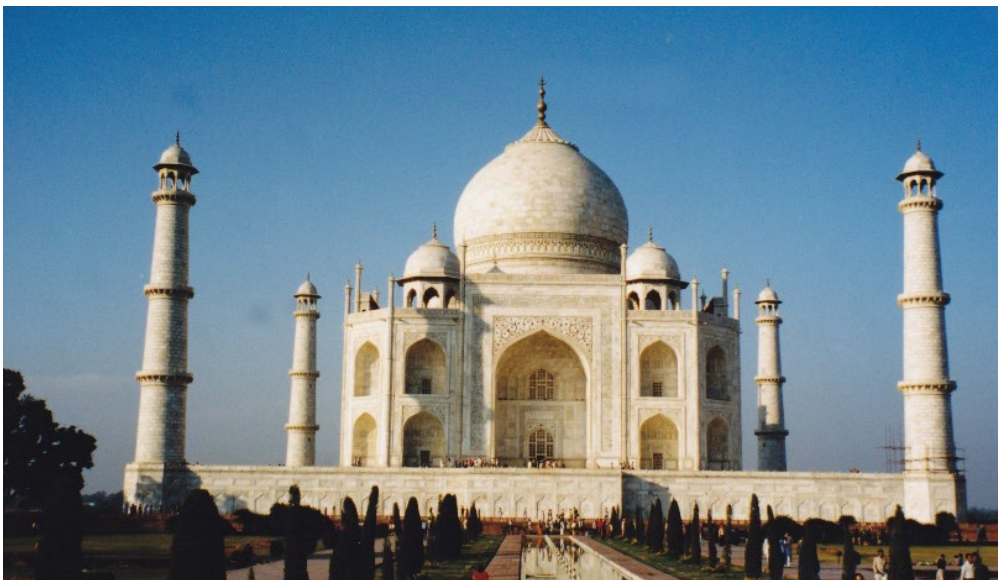


王の切ない想いタージマハール インド

ジャムナー川のほとりに建つタージマハールは世界に比類ない美しい霊廟である。ムガル王朝第五代皇帝のシャー・ジャハーンが愛してやまないお妃”ムムターズ・マハル“のために建てた左右対称の総大理石造りである。長い年月（1632年着工、1653年完工）と常時2万人ともいわれる膨大な労力をつぎ込んで完成させた廟はインドイスラム文化の代表的建築物とされている。



非の打ちどころのない美しいタージマハール

堂々たる正門をくぐると庭園内に入る、長い噴水に沿って歩き基壇に到達する。近くで見る霊廟は巨大である。霊廟に入るには基壇の下で誰しものが靴を脱ぎ裸足になる。基壇はおよそ5、5mあり石段を素足で登ると白い大理石に覆われている広場があり多くの人々がたむろしている。内部へ入る人は宝石をはめ込んだ大きな壁面の下にある入り口から誘われる。

イスラム教の飾り気のないモスクと同様、タージマハールの内陣も簡素である。シャー・ジャハーンと愛妃ムムターズの二つの石の棺が肩を寄せ合うように安置されている。



内陣への入り口



門からはるか遠くにそびえたつ



霊廟への入口の門

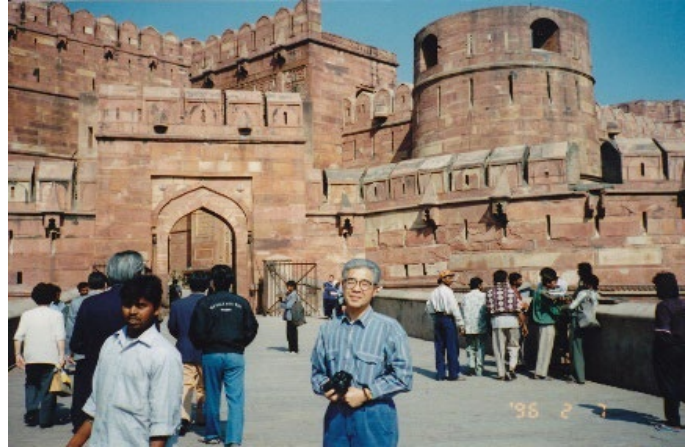
タージマハール建設にあたっては、インドは勿論欧州はじめ各国から名工や専門家が呼び寄せられ建設に携わった。建設資材や壁面に象嵌されている宝石や貴石などはインド、トルコ、アフガニスタンなどから広く調達された。

近年大気汚染など環境悪化で白い大理石が汚れ、さらには酸性雨の影響で大理石が解けるなどの被害が起こり、周辺での石炭の使用禁止、車の乗り入れ規制などインドは環境浄化に躍起となっている。

ムガル帝国の本拠地であるアーグラ城は代々の皇帝の居城である。ムガル朝第三代皇帝アクバル大帝が築城し、第五代皇帝シャー・ジャハーンが現在のような威圧を感じさせる堅固な城にした。赤味がかかった石でできた巨大で堅牢な城砦である。城の外見からは威圧的で戦闘的な印象を受ける

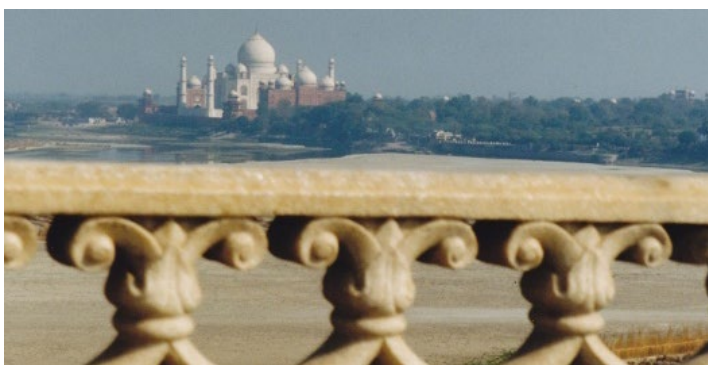


アーグラ城の威容



城門

が、城門から長いアプローチをへて広い城内に入ると、庭園や建物は優雅で贅を凝らした造りで外観の厳めしさとは全く印象が異なる。庭を散策しているとゆったりした気分となり、そして華やかさを感じる美しい庭園が城外の喧噪を忘れさせる。因みにムガルとはモンゴルの意味である。ムガル帝国の最盛期の皇帝がシャー・ジャハーンである。シャー・ジャハーンは、皇位を継承した3男のデカン地方の太子だったアウラングゼーブにアーグラ城に幽閉され、愛妃ムムターズの眠る白い大理石のタージマハール廟を眺めながら1666年74歳で永眠した。

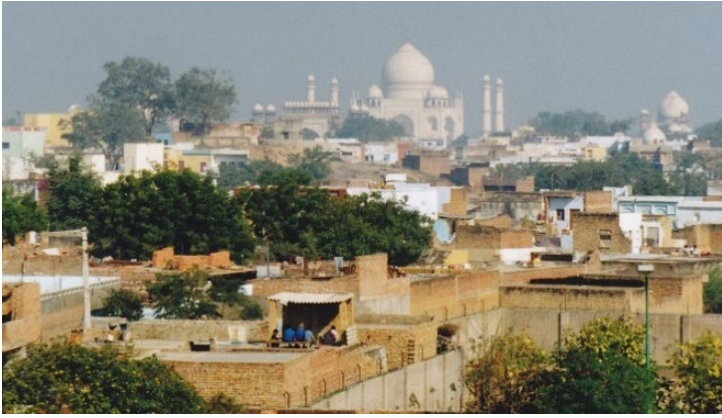


幽閉されていたテラスから愛妃を偲ぶ

されていた部屋のテラスからガイドが説明しながらフーッとため息をついて、さらに続けてイギリスのインドからの搾取は莫大だったと慨嘆した。

ムガル帝国は遠くチムールの血を引く武人がインドに帝国を築いたことに始まる。帝国の始祖はバーブルであるが332年間インドがイギリスの植民地になるまで続いた。

イギリスの世界一のダイヤモンドはアーグラ城にあったものだそうだ。居城やタージマハールの大理石の壁面などに象嵌してあった宝石・貴石・ラピスラズリ・金など全て残らずイギリスへ運んでしまったとシャー・ジャハーンの幽閉



遠くに霞み浮き上がるような白亜の廟

タージマハールは写真や絵画でこれまで何度となく目にしてきたので、最初目にする時のどきりとさせられるあの初対面の興奮は無かったが、少し離れたホテルの庭から夕陽にけむる白いタージマハールの残像は、今も心に焼き付いて離れない。